



VISTA 6 ユーザーレポート

独立行政法人日本芸術文化振興会 国立劇場 様

VISTA 6 / D950

大劇場の音響調整室に2台のVISTA 6とD950を採用



独立行政法人日本芸術文化振興会
国立劇場 舞台技術部

国立劇場について

「我が国古来の伝統的な芸能の公開、伝承者の養成、調査研究などを行い、その保存及び振興を図る。」ことを目的とし、昭和41年より伝統芸能の公開及びその公演を行ってきた劇場です。

改修について

国立劇場大劇場としては、開場以来3回目の調整卓の入れ替えになります。昨今の音声のデジタル化をふまえて、新しい調整卓の姿について議論を重ねてきました。特にデジタルにこだわった訳ではありませんでしたが、スペース、コスト、操作性などの面でデジタル化することになりました。伝統芸能と言うことで電気音響の必要性が低く思われがちですが、当劇場では開場以来、歌舞伎のセリフ、邦楽の演奏などを拡声しており、最近の公演では入力チャンネルが60本を超えることも珍しくない状況です。通常の歌舞伎公演に於いてもマイクだけで約30本使用しています。それに再生が加わると大騒ぎです。勿論、伝統芸能の雰囲気損なうことの無いように、お客様には電気音響の存在を感じることなく楽しんで頂いていると思っています。そんな現状での改修と言うことで、規模としては96チャンネル以上の入力チャンネル、32以上

の出力パスが必要という結論に達しました。また、「日本の太鼓」公演に代表される大音量の公演から、地唄、上方唄などの極小音量の公演まで対応しなくてはならないため、原理的に小音量時の計算誤差が少ない浮動小数点演算方式のDSPは必須と言う結論に達しました。卓内部でのレベル管理の必要が無いことも浮動小数点演算方式を選択した理由の一つです。操作性の条件としては、フェーダー位置での各機能の操作が出来ることを重視し、フェーダーを操作しながら別の場所のディスプレイを視認するようなインターフェイスは非人間的との結論に達しました。このような経緯で改修の仕様が出来上がり、スチューダー社のVISTA6が導入され、現在に至るまでトラブルもなく無事に運用しています。

VISTA6について

とにかく使いやすいの一言に尽きます。私達が求めていた仕様を全てクリアしているのは当然のこととして、それ以上に自由度が高く、オペレーターの希望を叶えてくれるような調整卓で非常に満足しています。納入後、オペレーター達の講習会を開く予定でしたが、講習会を待たずに基本的な操作をマスターしてしまい、講習会が必要なくなるほどでした。やはり秀逸なのはピストニクス画面で、これを使用して煩雑になりがちなデジタル卓の操作を、見たままに、そ

のポジションで操作できます。オペレーターの負担を軽くする素晴らしいインターフェイスだと思います。また、モニターに関しては外部のモニターユニットでエアーマイクやバスアウトをミックスして聴いており、そこに外部ディスプレイと増設キーボード、マウスを設置してあるため、センターセクションは殆ど使用しておらず、殆どの操作はフェーダーベイだけで済んでいます。リスニングポジションの移動も最小限に抑えられ、もはやアナログの卓には戻りません。調整卓の仕様は専用のコンフィグ・ソフトで、DSPの処理能力の範囲内で自由に設計でき、しかもマウス操作だけで呼び出せるので、どんな公演が来てももう大丈夫です。また、生の舞台と言うことで信頼性にも非常に気を配り、色々と意地悪な想定をしてテストしましたが、DSPボードの一枚が故障しても自動的に予備のボードに切り替わる等、コアの信頼性も充分で、電源瞬停時の復帰も早く、予想以上の安全性を確保しているように思いました。スチューダー・ジャパンの対応も非常に良く、色んな我が侘をきいて頂きましたし、調整卓のソフトウェアも様々な要望を取り入れて進化しており、この先の事を考えても安心して長く使い続けられる調整卓だと確信しています。スチューダー・サウンドで作られた日本の伝統芸能の音を、一人でも多くのお客様に聴いて頂けよう、皆様のご来場を心よりお待ち申し上げております。